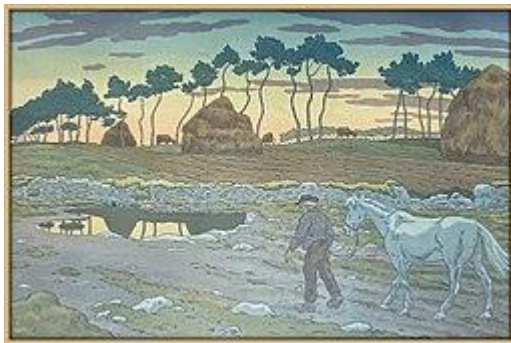


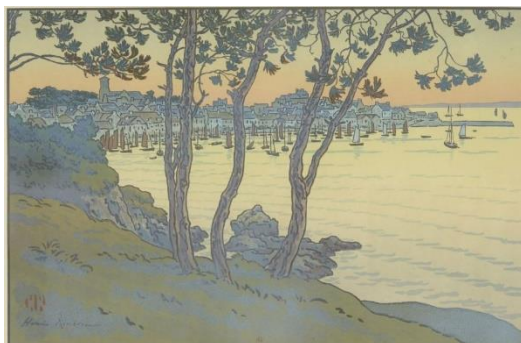
181 フランスの浮世絵師 - アンリ・リヴィエール (2023 年 8 月 1 日)

アンリ・リヴィエール (1864-1951) は、ジャポニズムがブームの時代に活躍したポスト印象派の画家です。リヴィエールは、絵画のみならず、浮世絵から影響を受けた版画も制作したことから、フランスの浮世絵師と言われることがあります。以前に、リヴィエールが葛飾北斎の「富嶽三十六景」にちなんで制作した[エッフェル塔三十六景](#)をご紹介しました。また、リヴィエールは、北斎や広重の浮世絵を数多くコレクションしていました。リヴィエールの死後、リヴィエール自身の作品や彼がコレクションした浮世絵は、遺産相続のためにフランス国立図書館に寄贈されたことから、現在はフランス国立図書館の電子図書館ガリカでこれらを閲覧することができます。

ブルターニュの自然を愛したリヴィエールは、現地に滞在して数多くの風景を描きました。今回は、リヴィエールが残した作品の中から3作品を選んで、リヴィエールと浮世絵の関係を見ていきます。まず、写真左下のリトグラフの「夕暮れ」と右下の北斎による「富嶽三十六景 程ヶ谷」をご覧ください。リヴィエールが描いたものは日本の風景ではありませんが、不自然なくらいにゆがんだ幹が目立つ木、馬と人が左から右へ動いているという構図が似ています。



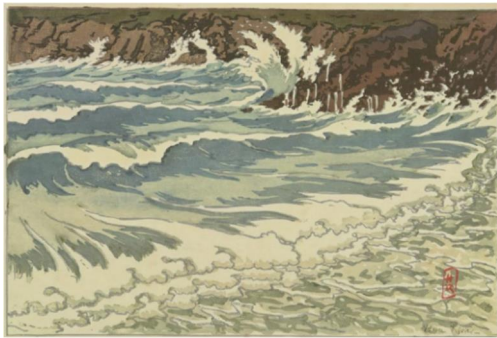
次の作品は、リトグラフの「ドウアルヌネの港」(写真左下)と歌川広重の浮世絵「本朝名所 駿州清美ヶ関」(右下)です。大きく湾曲した入り江の穏やかな波とその奥に並ぶ建物が描かれているところが似ています。ブルターニュ地



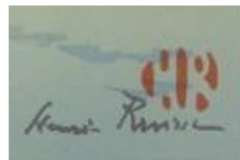
パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

方には、入り組んだ海岸線があります。日本の海岸線も入り組んだところが多くありますので、似たような景色になったのかもしれませんが。この広重の浮世絵は、リヴィエールが所有していたものです。リヴィエールは広重の浮世絵を見ていたのですから、広重の浮世絵を参考にしたと推測することもできるのではないのでしょうか。

三つ目は、木版画「波しぶき」（写真左下）と北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浦波」（写真右下）を比較してみてください。波の形は異なりますが、海は、濃い色、少し薄い色と白色が使われ、大きく分けて三色で色分けされているところが共通します。また、白い波しぶきが、波の激しさを表現しています。「波しぶき」は木版画ですので、浮世絵に近い形で作品を制作していたことが分かります。



リヴィエールの作品を観ていて、もう一つ浮世絵の影響を受けていると思われる点を見つけました。リヴィエールの作品の多くには、署名のほかに「HR」というイニシャルの印が押されています（写真右は拡大図）。ガリ



カのコレクションでは、横向きの楕円形に白抜きの文字が入っているものと右上がりの長方形に赤字の文字が入っているものと二種類あります。これは、落款印に似ています。落款印とは、日本の書画の制作の最後に、作品が完成したことを示すために押印するものです。上の写真の右端は、広重の浮世絵の落款印の一例です。落款印は、朱肉を使います。浮世絵の場合は、作者の雅号に限らず、版元や摺師の印が押されることもあります。リヴィエールがイニシャルの印を押すときには、浮世絵師のような気持ちになっていたのかもしれませんが。